

ヘンリー・フォールズ『ニッポン（Nipon）滞在の9  
年間 -日本の生活と仕来りの概観』 -第4章  
路上の情景-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2018-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長尾, 史郎, 高畑, 美代子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/19239">http://hdl.handle.net/10291/19239</a>

ヘンリー・フォールズ『ニッポン滞在の9年間』  
——日本の生活と仕来りの概観』

長尾史郎  
高畑美代子

第4章 路上の情景

日本の生活の非常に多くが通りで営まれていて、そこで眺めているのが最高だ。古風な日本人が溜息をつく古き良き時代には、家庭内の振る舞い、現在、見苦しくもなく適切だと考えられるよりもかなり多くが公然と人前に曝されていたのだ。しかし、いずれにしても、他の東洋の国々では極めて特徴的な、私的生活のあの病的な隠蔽はほとんど目にしない。家々は、暖かい季節には、床から屋根まで開けっ広げで、隠すなんてことは不可能に近い。そして夜には、紙の窓が互いに引き寄せられて閉じられるが、多くの厄介な悲劇や抱腹絶倒のコメディーを無意識の居住者が陰で演じているのだ。日本人の漫画家は、実際、国民生活のこの顕著な様相を掴み利用するのに遅れをとらなかったのであり、滑稽な写し絵ないし影絵が、どんな版画店や本屋の窓でも見ることができる<sup>1</sup>。

<sup>1</sup> [参考]



東京と大阪の両市は運河が縦横に走っており、それらに架かる橋は、必然的に数が多い。それらはしばしば、極めて気宇壮大で詩的な名前を持つ——「永遠の生の橋 [永代橋]」<sup>Bridge of Eternal Life</sup>「美しい集まりの橋 [相合橋]」<sup>Fairy Assembly Bridge</sup> 等々という具合だ。行きどまりは「袋小路」<sup>blind alley</sup> と称する。日本国民はこよなく自然を愛し、東京の通りの無慮三分の二は自然の事象・実物そのままに名付けられていると言う——この傾向はこの国の装飾美術全般が十二分な例証となるだろう。グリフィス氏が指摘しているところだが、大きな諸戦場は——日本にそれはかつて事欠かいたことはない——この仕方では名を残さず、また数多の英雄の名前が、賞賛する後世に、個々の通りに名を冠せられて伝えられているのに出会ったことはない。だが、人気の相撲取りや剣豪、僧侶・尼僧、それに有名なイギリス人水先案内人（ウィル・アダムス三浦按針<sup>William Adams</sup>）はこのようなやり方で不

展覧会図録「影絵の十九世紀」…「影」を切り口に幕末から明治にかけての日本における画像表現を集めた本展覧会は、平成7年にサントリー美術館で開催されたもの。日本画から浮世絵、書物挿絵、写真、幻灯等に渡る幅広い展示を通して、日本文化特有の陰影感覚に触れることの出来る興味深い一冊です。[http://d.hatena.ne.jp/tengyu-tenjin/2011\_0227/p1]



[同上書, p. 30]

- <sup>2</sup> ウィリアム・アダムス (William Adams 1564-1620 [永禄 7-元和 6]), 慶長 5 [1600] 年 3 月 16 日に日本に漂着したオランダ船リーフデ号のイギリス人航海士——ケント州チャタムの近くのジリングムの生まれで若いころから船乗り。関ヶ原の戦いの後に徳川家康に仕え家康から三浦按針という名を与えられ、三浦郡逸見村に領土も与えられた。領地の地名にちなんだ名を冠している。本書のアダムスの名ウィルはチェンバレンの高梨健吉訳『日本事物誌』1でも同様に記されている。またチェンバレンはハルコート協会から出版された『日本年代記』に収められたアダムスの手紙を「異様な綴字 (スペリング) で書かれた文章の中から浮かび上がってくる筆者 [アダムス] の生き生きとした映像を知るためにも、また、彼が描いている当時の日本の姿をうかがうためにも読む価値が充分にある。」と述べている。

朽の名誉を与えられているのだ。「<sup>Shipway Street</sup>船路通り=入船町<sup>3</sup>」を通して「<sup>Lance Street</sup>槍屋町<sup>4</sup>」そして「<sup>Arrow Street</sup>弓町」へと進み、好奇心を煽り、楽しませ、教えるものを見てみよう。

庭の戸口を出てみると、我が料理人（ここでは料理人は全員、男だ）の娘の小さな少女〈おつる〉つまり<sup>ミス・グリーン</sup>「鶴」——そう呼ばれている——が、忙しく、<sup>パイ</sup>泥饅頭を作っているのではなく、とても小さなままごとの庭を造っている——石ころを、自然のように、傾斜する層に積み上げる。丸くした山を、数世紀に亘る雨で溝ができたようにし、こじんまりして趣味の良い歩道、節くれだった松の枝々で陰を投げかけ、それから様々な色合いに半ば開いた<sup>つつじ</sup>躑躅の蕾の巧みな対照で華やぎを添える。数本の葉付きの竹が、細心の技を以て配され、大いに満足のいく小さな景色が完成する、それは僅か1平方フィート [0.09 m<sup>2</sup>] ばかりなのだ。そうした芸術感覚の顕現を日本では素質だという。私はその言葉の意味するところをよくは知らない。しかし私の理解するところでは、一定の先祖から受け継いだ性向と慣習が反復せられた結果、恵まれた境遇のもとで子孫において際立つのだろう。

日本については、このほとんど<sup>あやま</sup>過つことのない芸術感覚は——例を挙げるには事欠かないのだが——、比較的最近の起源を持つもので、主として外国の教えに起因する。

極めて著しい効果は見られるが非公式な<sup>たぐい</sup>類の芸術教育は、廉価な挿絵入り本の拡散を通じて、由来、自然の美への嗜好の促進の助けとなったが、それはもちろん、啓発され得る前から、しかるべく有ったのだ。

この脇道の想いから呼び覚まされたのは、空中高くからの奇妙なビューンビューンという音で、私はエオリアンハーブ<sup>5</sup>を思い出した。それは

<sup>3</sup> 東京都中央区の旧町名。

<sup>4</sup> 旧京橋区、現中央区銀座。築地居留地に接する地域。

<sup>5</sup> Aeolian Harp —— 羊の腸線を反響箱に張った弦楽器。風が吹くにつれてその圧力で鳴り出す。ギリシャ神話の風神アイオロスに由来する。

「<sup>singing kite</sup>歌う凧 [うなり凧]」によるもので、形は千差万別だ——日本の長いキモノを着た赤子、両翼を広げ尾羽を一杯に開いた鷺、恐ろしい形相の<sup>orge</sup>鬼<sup>6</sup>——、ないしは派手な花、または燕の尾をした蝶々の形をとることもある。凧を安定させるために2本の長い尾を下端の両側に付ける。そして、立派な高く飛ぶ凧を持ったいかにも嬉しそうな元気いっぱいの少年がそれを巧みに操り、凧糸の許す限り高く揚げて彼の立ち位置から1, 2ヤード以上と動くことが無い。素晴らしいのはジンリキシャ [人力車] の車夫が示す良き心根で、私は仕事上の巡回でこれを見かける<sup>たび</sup>度にますます驚きを<sup>こ</sup>昂じるのだが、彼らの顔が勢いよく凧糸とぶつかることがあるのだ。通行者はその接触をタイミングよくひ<sup>d</sup>よいと<sup>k</sup>かむ<sup>く</sup>ことで巧妙至極に<sup>ま</sup>避けるのだが、しかし、事故が起こる<sup>たびごと</sup>度毎に——それが我々にとっていかに煩わしいものであっても——<sup>しか</sup>鞦<sup>め</sup>面ひとつ現すことは滅多に無く、<sup>ま</sup>益してや怒りの言葉も、説教がましい言い返しも無い。

報じられるところでは、昔は大きな凧が敵勢力概数の偵察を進める目的で使われたという——これは、我々が<sup>baloon</sup>気球を近代戦で利用したのと同じだ。東京に1つの法令が有って、凧は一定の常態の大きさを越えて作ってはならないと規定していた——將軍の居城が市中から陰謀者により視察される恐れがあったからだ。日本のある医学著述家（あゝ、今は亡い）の最も喜ばしい『ジャパン・ウィークリー・メール』<sup>7</sup>へのある寄稿は、東京で凧を上げる一人の盲目の少年についてこう記す——「誰がこの光景を記述する、誰が適切に<sup>pourtray</sup>描くだろうか、この盲目の男の子を——子供は身体を前に傾けて、喜びに打ち震えながら立っている——凧が引き引っ張って逃げようとするのだ——哀れな、<sup>つ</sup>艶を失った両眼が大きく開かれ、頬は紅潮し、唇は開かれ興奮

<sup>6</sup> 長崎県壱岐の鬼凧（恩田子）が有名。

<sup>7</sup> 1870年1月（明治2年12月）から1917（大正6）年にかけて、横浜で刊行された外国人向けの英字新聞。アーネスト・サトウ、バジル・チェンバレンなどジャパノロジストたちが寄稿している。1918年に『ジャパン・タイムズ』と合併、『ジャパントイズ&メール』。その後名前変えながら現在に至る。

に震え、両手の不随意な筋肉の一つひとつが働いて、指たちが風糸と遊ぶ——この糸に沿って彼は全霊を雲間の玩具へと投げ出すのだ。『ハイ！ハイ！脇へ避ける！』ノリモン（<sup>セダン・チェア</sup>駕籠）の私の友人たちよ、単なる輪郭に過ぎない子供に訴えかけても無駄というものだ——その実態は諸君の遙か頭上の糸の末端に在るのであり、決して貸す耳は無いのだ、だから決してそんな大声で呼びかけないがいい。』

一年の或る決まった日に、たくさんのすごく大きく明るく彩色されたものたちが<sup>まち</sup>市の上空を漂って、と言うよりよろめくのが見られる。それは巨大な鯉の形をし、着色された薄い布製で、中は空洞なので、風邪を孕み、活き活きと泳いでいるような姿になる。普通、前年中に目出度く男子が誕生したことを祝うのだが、しかし男の子が最近、誕生したのでなくても、家庭内に男の子がいれば<sup>こいのぼり</sup>鯉職を揚げるのだ。

東京在住の或る学識の深いイギリス人教授が、大学構内でもったいぶった厳めしい同僚たちをあきれさせたのだが、それと言うのも、彼の戸口に初児の出生を記念して祝う巨大な鯉職を掲げたというのだ。それは日本の風聞[旧暦5月5日まで飾られる]に反し、またより幸運に恵まれない同僚たちのそれ以上の嘲りに逆らって、ありえないほど長い間飾られていたのだった。



[染物(洗い張り)をする女(日本人のスケッチ)]

閑静な裏通りの多くで女たちが戸外で布を染色し色付けしているのを見かける。とても簡単な手順で、「<sup>f a s t</sup>褪せない」色を出そうとはしない。化学物質もまた模様の色抜きのために使われている。

繁華街を通りながら色々な店を覗き込むのは面白い。床々は上質の草<sup>grass matting</sup>敷物[畳]——下に詰め物をしてある——で覆われ、恭しく靴を脱ぎ、あるいはそうしないことの言い訳をするが、後者の姿は西洋からの「蛮人」たちの間では残念ながらよくあることだ。

ありとあらゆる西洋の小間物、あるいはそれ以上にその巧妙な模造品が売

られている。最新流行のパリ・ファッション、消防車、特許薬剤品、科学的諸装置、1人の日本人の発明になる夥しい数の奇妙で新奇なコンロ——多孔質の種類の火山岩で作った——、鉄の扉——ありふれた木製の取っ手とうまく調和している！ペイズリー織りのショールにブリュッセルのカーペット、バス社<sup>8</sup>のビール、エップス社<sup>9</sup>のココア、骨董の甲冑、脱聖人の仏教聖者

<sup>8</sup> The Bass Brewery——1777年、William Bassにより英国で創設。主要ブランドは英国で最高売り上げを記録したビール Bass Pale Ale で、その後、世界最大の醸造会社になる。商標は英国最初の登録商標となる。[拙訳]



[https://en.wikipedia.org/wiki/Bass\_Brewery]

*What is a perfect cup of beer?*



三角マークのバス社のビールが輸入され、日本人が飲んでいたことが分かる。「牛肉を食べ、ビールを飲めば一人前の人間になれると思っている馬鹿な鳥（日本）の肖像」（清水勲訳）のキャプションが付いた諷刺漫画。口に牛肉を咥え、卓上の瓶にはバス社の名と△のロゴが見られる——

三角マークのバス社のビールが輸入され、日本人が飲んでいたことが分かる。「牛肉を食べ、ビールを飲めば一人前の人間になれると思っている馬鹿な鳥（日本）の肖像」（清水勲訳）のキャプションが付いた諷刺漫画。口に牛肉を咥え、卓上の瓶には以下のようなバス・ビールのロゴが見られる——



[出典『ジャパン・パンチ』1872（明治5）年11月号掲載：『ワーゲマン日本素描集』、岩波文庫、p.98]

<sup>9</sup> エップス社はビクトリア時代を代表するココアのブランド。1800年代エップス社のココアは世界中に輸出され、イギリス文学中にもその広告は登場する（参照：結城英雄「ジョイスの時代のダブリン」(1)(2)——法政大学文学部紀要 52（2006 0306）、53（20061010））



[https://www.google.co.jp/search?q=epps+cocoa&hl=ja&rlz=1T4GGLL\_jaJP393JP394&tbm=isch&tbo=u&source=univ&sa=X&ved=0ahUKUewjEzb\_Aq-nJAhpUk14KHU16AXAQAQIMg&biw=1190&bih=693#imgrc=kCYgk6ep4kr0VM%3A]

たち、使い古しのミシン。

日本の商人は、軽蔑すべき「毛むくじゃらの外人」から教訓を受ける以上には出なく、この広告の領域に時としてクイーンズ・イングリッシュの稀な見本が見られることがある。ここに尊重すべき1例がある——効果を出すための改善は全くされていない——

告知  
製靴業者  
意匠選択自在

undersigned 署名者は往時より成功裏に東京の伊勢勝製靴工場<sup>Isekats</sup><sup>10</sup>にて修行を積み、今や下記の地所において我が債務として確立せられ、全施設は品質良好の穏当なる条件にて手当せらる。

ご用命嘉納せらる——郵便受信にて——寸法告知次第、供給せらる。

U・イノヤ

元町<sup>11</sup>、5丁目、206番地<sup>12</sup>

新来の外人がちょっとの間、店先に立つと、まず間違いなくちょっとした野次馬に取り囲まれる——彼の言葉のトチリを聞き、また狡猾な骨董屋の店

<sup>10</sup> 明治3年(1870年)3月15日、旧佐倉藩士西村勝三(1836-1907)が築地入船町5丁目1番に伊勢勝・造靴場を作った。大村益次郎から日本人に合う洋靴の製造を依頼した。



[公文書館デジタル・アーカイブ]

<sup>11</sup> 東京市のどこを指すか不詳。

<sup>12</sup> 原文は——

NOTICE. / SHOE MANUFACTURER. /Design at Any Choice. /The undersigned being engaged long and succeeded with their capacity at shoe factory of Isekats, in Tokio; it is now established in my liability at under mentioned lot all furnishment will be attended in moderate term with good quality. /An order is acceptable, in receive a post, being called upon the measure and it will be forwarded in furnish. /U. INOYA, /No. 206, 5th St. Moto-machi.



主が言葉巧みに彼からお札を巻き上げるのを興味深々と見つめている。しばしば思ったのだ——もしも民俗学者が、もしも或る目にもとまらぬ瞬時のやり方で、ドルトン氏が最近、科学界の興味を掻き立てたようなマルチ写真のようなものによって顔の様々な典型を生じさせることができるものとしたならば、どんなに愉快なことだろう、と。そうだとしても、それはつまるところ、リーチ<sup>13</sup>、デュ・モーリア<sup>14</sup>、コーデコット<sup>15</sup>、ラルストン<sup>16</sup>といった諷刺画家が、英国社会の諸型についてやってくれたものというに過ぎないのでは？ トミー・アトキンズ [英陸軍兵士]<sup>17</sup>のイメージを、限られた数の写

<sup>13</sup> John Leech (1817-1864) — 英国の風刺画家、パンチ誌に描いた。

<sup>14</sup> ジョージ・ルイス・パルメラ・ブッソン・デュ・モーリア (George Louis Palmella Busson du Maurier 1834-1896) — フランス生まれのイギリスの諷刺画家。パンチ誌で活躍。

<sup>15</sup> ランドルフ・コールデコット (Randolph Caldecott 1846-1886) — 英国の挿絵画家、多色木版画家。マザー・ゲースなど子ども向けの絵本で現代絵本の基礎を築いた。多作で知られる。日本ではフェリス女学院附属図書館が多色木版の絵本シリーズを所蔵。米国で1937年から優れた絵本にイラストをつけた画家ヘコールデコット・メダルが贈られている。

<sup>16</sup> William Ralston (1848-1911) — 英国の挿絵画家、パンチに描いた。

<sup>17</sup> 英陸軍の兵士のあだな。1815年以來、陸軍法規に無名兵士の代表として Thomas Atkins という名を用いたところから、一兵卒の意に用いられる。



[第一次世界大戦でよく歌われた軍歌にもなった歌曲の楽譜 (1912年版) 表紙。文面——トミー・アトキンズ：彼らが行進中に歌う歌『遙かなティペラリー (It's a Long[, Long] Way to Tipperary)』※ティペラリーはアイルランドの州名—— [https://www.google.co.jp/search?q=Tommy+Atkins%E3%80%80%E3%82%A2%E3%83%88%E3%82%AD%E3%83%B3%E3%82%B9&start=10&sa=N&hl=ja&rlz=1T4GGLL\\_jaJP393JP394&biw=1190&bih=693&tbm=isch&imgil=YOF1DJ17KIOhFM%253A%253BFVgkSVnlOPc5AM%253Bhtlp%25253A%25252F%25252Fwww.sekaimon.com%25252Fus%25252F1452%25252FMilitary%25252C%2525252BHistorical%25252F331115255700%25252F&source=iu&pf=m&fir=YOF1DJ17KIOhFM%253A%25252FVgkSVnlOPc5AM%252C\\_&usg=\\_\\_eGd0G1gKaGXzo2CyF\\_x\\_56v\\_I-4%3D&ved=0ahUKewjstK7O6PDJAhWif6YKHe5xCE84ChDKNwgz&ei=Cvd5VuyHHaKvmaXU46H4BA#imgrc=YOF1DJ17KIOhFM%3A&usg=\\_\\_eGd0G1gKaGXzo2CyF\\_x\\_56v\\_I-4%3D](https://www.google.co.jp/search?q=Tommy+Atkins%E3%80%80%E3%82%A2%E3%83%88%E3%82%AD%E3%83%B3%E3%82%B9&start=10&sa=N&hl=ja&rlz=1T4GGLL_jaJP393JP394&biw=1190&bih=693&tbm=isch&imgil=YOF1DJ17KIOhFM%253A%253BFVgkSVnlOPc5AM%253Bhtlp%25253A%25252F%25252Fwww.sekaimon.com%25252Fus%25252F1452%25252FMilitary%25252C%2525252BHistorical%25252F331115255700%25252F&source=iu&pf=m&fir=YOF1DJ17KIOhFM%253A%25252FVgkSVnlOPc5AM%252C_&usg=__eGd0G1gKaGXzo2CyF_x_56v_I-4%3D&ved=0ahUKewjstK7O6PDJAhWif6YKHe5xCE84ChDKNwgz&ei=Cvd5VuyHHaKvmaXU46H4BA#imgrc=YOF1DJ17KIOhFM%3A&usg=__eGd0G1gKaGXzo2CyF_x_56v_I-4%3D)

真をどれだけ持ち寄っても、ラルストンのほんのひとふで一筆が伝える以上のことは  
 できまい。それゆえまた、人は技巧と真の芸術的直観をもって、この地の画  
 家や彫刻家が残した民族の純朴な着想を申し分なく結びつけ得るのであろう  
 か。群衆を構成する、静かで微笑まない、無感動で注意深い顔々を見回して  
 みよ。まず、若い少女たちが一列に並んで居る — 各々がその用のための専  
 用のおんぶ紐で括り付けた、本当にいたいけな赤ん坊を、背中に背負しよっている。  
 みじめなチビurchinは一日中、陽に焼かれていて、眠っているときは — た  
 いていの場合 — そのこのっくりのっくりする頭は、まるで雛嚶粟ホビウの項垂うなだれる  
 蕾つぼみのようにだらりと垂れ下がり、遊び好きの子守りが動く度になすす  
 べもなくグラリと揺れる<sup>18</sup>。日本の子どもたちは、普通、約4歳になるまで  
 — 極めてしばしばその歳でも — 乳離れしない。幼児は頭を入念に丸剃そ  
 りにしているが、他方、少し年長になると、房のような部分が「四隅で」垂れ



[ラルストン描くアトキンズ：William Ralston, The Modern Tommy Atkins

— [http://www.art.co.uk/gallery/id\\_a62626/william-raiston-prints\\_p5.htm?ui=6AE234DF97094E3BBF681AB3C8F32165&Aff=CONF&RFID=120713](http://www.art.co.uk/gallery/id_a62626/william-raiston-prints_p5.htm?ui=6AE234DF97094E3BBF681AB3C8F32165&Aff=CONF&RFID=120713)

<sup>18</sup>

[参考]



[幼子を背負少年—1945年 — [https://www.google.co.jp/search?q=%E8%B5%A4%E3%81%A1%E3%82%83%E3%82%93+%E8%83%8C%E8%B2%A0%E3%81%86&sa=X&tbn=isch&tbo=u&source=univ&ved=0ahUKEwjti5252cbTAhUNNBwKHbzvCIIQsAQIlg&biw=1111&bih=718#imgrc-jr62M2pm\\_dKtmM:&spf=196](https://www.google.co.jp/search?q=%E8%B5%A4%E3%81%A1%E3%82%83%E3%82%93+%E8%83%8C%E8%B2%A0%E3%81%86&sa=X&tbn=isch&tbo=u&source=univ&ved=0ahUKEwjti5252cbTAhUNNBwKHbzvCIIQsAQIlg&biw=1111&bih=718#imgrc-jr62M2pm_dKtmM:&spf=196)]

下がり<sup>19</sup>, あるいは剃られた頭の天辺<sup>てっぺん</sup>の周りに南蛮坊主のような縁髪<sup>へりがみ</sup><sup>20</sup>が残される。ずっと昔に片が付いている話だが、これらの各種の髪型は明らかにヒンズー教のカーストからの遺物で、その象徴性の観念を仏教が——いかにも一見したところありそうに無く見えても——インドから極東へともたらしたのだ。これに似た類の多数の例はあるのだが、本章では適切なものを挙げることはできない。

我々のすぐ近くに、酷くだらしの無い一群の歩兵たちが居る——石炭バケツ型のシャコー帽<sup>shako</sup><sup>21</sup>, ブラシを掛けていない服, 出来の悪い外国靴——踵が擦り減っている。顔は酒で赤ちゃけている。見たところ気性は荒っぽく, 着装武器 [銃剣・ピストル等] を帯び, とにかく逆らえばそれを使うに吝か<sup>やぶさ</sup>で

#### 19 (男の子の髪型)

[<http://ameblo.jp/horned-owl/entry-11454426375.html>]



↑ [年齢順配列]

3歳まではEの坊主頭。3歳からAのように前髪を生やします。その後、頭上に髪を残すD。これは芥子坊と呼ばれます。『子連れ狼』の大五郎の髪型は芥子坊ですね。Bは、芥子坊を伸ばし、前髪を結び、中剃りをして残りをつらした5, 6歳ごろの髪型。そして、Cが10歳以上の男の子がする若衆髻です。 [[http://www.tos-land.net/teaching\\_plan/contents/5229](http://www.tos-land.net/teaching_plan/contents/5229)]

20



[[https://www.google.co.jp/search?q=monk+fringe%E3%80%80head&hl=ja&rlz=1T4GGLL\\_jaJP393JP394&tbn=isch&tbo=u&source=univ&sa=X&ved=0ahUKewJ4ose9hvHJAhVDLaYKHcthCG8QsAQIMQ&biw=1190&bih=693&imgc=Sh5wasGBQ0y5uM%3A](https://www.google.co.jp/search?q=monk+fringe%E3%80%80head&hl=ja&rlz=1T4GGLL_jaJP393JP394&tbn=isch&tbo=u&source=univ&sa=X&ved=0ahUKewJ4ose9hvHJAhVDLaYKHcthCG8QsAQIMQ&biw=1190&bih=693&imgc=Sh5wasGBQ0y5uM%3A)]

21

シャコー帽 (シャコーぼう Shako) は目庇のある、高い円筒形の帽子である。前面に大型の金属製徽章と、上部に羽の前立が付されることが通常である。18世紀のハンガリーの騎兵の帽子 [csákó] に由来する。日本陸軍でも明治半ばまで下士・兵卒の帽子として採用していた。 [<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B7%E3%83%A3%E3%82%B3%E3%83%BC%E5%B8%BD>]

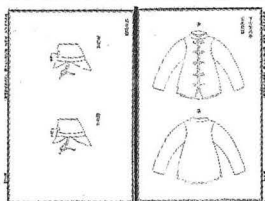
明治6年9月24日太政官第328号「陸軍部間制服改定」により、下士卒にシャコ帽が制定された。日本陸軍医最初に制服が制定されたのは明治3年だが、この時はシャコ帽を簡略化したケピ帽を採用。いずれも幕末明治初期に日本の軍を指導したフランスの影響による。

ない。近くに、二人の紳士的でしっかりした身なりの拳銃と軍刀を装備した  
 ジェンダルム<sup>ジェンダルム</sup><sup>22</sup>が兵士たちに静かな視線を注ぎ続けている。巨大な黒眼鏡が、暗青  
 色の服を着、白い綿の日除けの付いた海軍帽を被り、ずんぐりと小柄で脇の  
 下に日除け巻付棒<sup>window roller</sup> [サーベルか] のように見えるものを小脇に抱えた一人の  
 警官を従え、群衆を鋭く睨み渡し、しばしば皸枯れ声の日本語で——「そこ、  
 進め！」と語気鋭く命令している。



[日本の水撒き人]

我々は唯々諸々と従い——商店主の愛想尽かしく  
 かまわず——、眼を再び道路に転じる。雑踏は、人  
 力車<sup>リキシャ</sup>、騎馬隊、最も原始的な造りのよろよろした乗  
 り合い車、小ざっぱりしてうまく出来た馬車鉄道<sup>23</sup>、  
 稀にしか見ないカゴつまり神輿型乗物<sup>セダレン</sup>で、前に黄色  
 い旗を掲げている——コレはないし天然痘の患者  
 を病院に搬送中だということだ——、桶に水を入れた水播き人夫<sup>ウォーターマン</sup>——桶は  
 アイルランド人の靴下の<sup>パデ</sup>ように「穴だらけだ」<sup>イ</sup>で<sup>24</sup>、おとなしくしていた砂



[国会図書館蔵 大政官第328号]

<sup>22</sup> ジェンダルム (*gens d'armes*) —— フランスの警察官、フランス騎兵隊員、フランス語で武装警察官、フランスの保安隊員、憲兵隊員。

<sup>23</sup> 1874 (明治7) 年1月5日、京橋～新橋間にできた人力車と馬車専用道路、あるいは1882 (明治15) 年開業の東京馬車鉄道 (馬車軌道を走る)、またその両方を指していると思われる。フォールズ到着時は専用道路、本書出版時点では馬車鉄道が開業していた。

<sup>24</sup> Paddy's stocking —— Paddy はアイルランド人の別称。〈Patrick —— アイルランドにキリスト教を布教した聖人の名。Saint Patrick's Day が祝日。この祭日に女性はアイルランドを象徴するクローバー (shamrock) の緑色の長靴下 (St Patrick's Day Stockings) で着飾る (一般に緑色が象徴)。

[参考] 「網タイツと同様、どんな物でも<sup>full of holes</sup>穴だらけだ。」「どんな物でもスイス・チーズのように<sup>full of holes</sup>穴だらけだ。」 [拙訳; Stan Smith, *Irish poetry and the construction of modern identity: Ireland between fantasy and history*, Irish Academic Press, 2005, p. 238 — <https://books.google.co.jp/books?hl=ja&id=XbZlAAAAAAAJ&dq=irish+stocking++holes&focus=searchwithinvolume&q=holes>]

埃が耐え難い舞い上がる埃と、加えて泥へと分離する。これらの男は荷物を肩越しに担ぐ。天秤棒の両端に桶を括り付けるのだが、しかし、荷重を振り分ける様式の日本的独創性はこうだ——より短い棒をもう一方の肩の上に、長い方の棒にほとんど直角に置かれ、その一端が荷を一方の側に持ち上げるのに使われ、他端は空いた手で掴まれる。このようにすることで荷重は身体の両側により均等に振り分けられる。莫大量の荷駄がこの方法で運搬され、しかもそれが素早いのだが、それは素早く歩くための一定の躍動する動きを筋肉に伝えているからだ<sup>25</sup>。

もうちょっと先で、本通りが二股に分かれるところで、或る種の大規模な展示がなされている。新築の建物が花々や旗で派手に飾られている——イギリスではトルコ赤の単調なギラギラで家主は何らかのお祭りで、世間に対して自分が幸せであると思ってもらいたいとふんだんに飾り立てるものだが、これとは違うのだ。そうではなく、本当に優雅な、見事な単純さをもった意匠なのだ。陽気な吹き流し<sup>streamers</sup>、緑の下に垂れた竹と暗色の松の枝々が金色のオレンジの花綱を伴う下で、お神酒の菰樽<sup>rice-beer</sup>が堂々たるピラミッド状に積まれ、喉の乾いた公衆が、その日を限り、心行くまでただで飲めるのだ。これは店開きで、こうした仕方で開店する商人が成功と地域の人たちから最厚されるよう期待するのだ。上機嫌の群衆が二つの流れとなって、舗道を横切って押し合いへし

---

アイルランドの与太話——「アイルランド人に訊いた——なぜ、ストッキングを裏返しに履いているの？ 答えて曰く——なぜって、表側には穴が開いてるからさ。」[拙訳；*Éire-Ireland: A Journal of Irish Studies* vol. 19, Irish American Cultural Institute., 1984 —— <https://books.google.co.jp/books?id=2Fe1AAAIAAJ&q=irish+stocking++holes&dq=irish+stocking++holes&hl=ja&sa=X&ved=0ahUKEwib0d6N9cjTAhWBS7wKHWMA4ACEQ6AEIJzAA>]

<sup>25</sup> 原文の挿絵は、記述と異なり、直行する添え木が描かれていない——



〔箆入鰻売り 〈出典一風俗本『守貞漫稿』(嘉永六年)喜田川守貞画)——三谷一馬『江戸商売図絵』中央公論社, 1995, pp. 112-3〕

合いして進む。1つは青ざめてやや厳肅な、だが眼を血走らせて、顔には希望を輝かせている。他方は、紅潮した、軽薄な、いささか物憂げな者たちだ。

ここに、新参者を喜ばせるに違いないと思う或るものがある。それは子供たち向けの食べ物売りで、太い棒の両端に括り付けてある2つの長い複雑な仕組みのラッカー塗りの箱を、上述のように両肩に乗せている。奇特的な荷の担ぎ手は群衆の居る街角で停まり、小さな炭火炉に直ちに点火すると、直ぐに、炉に組み込まれた清潔な銅の皿が完全に熱くなり、商売開始だ。大きなボールに入った液状の甘いペーストが彼の仕込みの主要部分だ。程無く一群の腹を減らした子供たちが——そして、日本では、他国同様、子供たちは常に腹が減っている——小さな卓の周りに集まり、心そそられる小皿を買う。それぞれが、自分の買った分を熱した銅器の上に零し、器用に好きな形にすると、瞬時に、硬くバリバリし、茶色になる。売り手は小匙こしでもって掻き取ってお客に渡す。この満足のいく時間つぶしをする子供たちを眺めるのは全く減多にない大きな楽しみで、最も年端のいかない者が自分の財産を巧みに運用し、皆が肅々と、礼儀正しく、極めて手際よく事をこなし、驚くほどぶつかり合い、駆り立て、いがみ合いがほとんど無い。これらの行商食べ物屋は普通、もんじゃ焼き屋 (*mon ji yaki*)<sup>26</sup> と称せられるが、その昔、タネでもって漢字を書いたからだ。だが、それら、思考に有用な3万余りもある象徴シンボルも日本の若人たちにとっては十分な多様性を提供しはしないのだ。

私より才能のある一人がかねてより、この世俗の光景をいや増している。しかし、ここで私が思うに、英国公使館の故パーセル医師<sup>27</sup>の記述に手を入

26



[文字屋焼き——『北斎漫画 I 江戸百態』青幻社, p. 23]

<sup>27</sup> 外科医・少佐パーセル [Theobald Andrew Purcell (1841-1877)] は英国海軍軍医で、1871年来日。工部省お雇い、横浜のゼネラル・ホスピタル医師として働く。

れようとするのは、不遜なことだ [だからそのまま引用しよう]。それは、何年も前に『ジャパン・メール』誌のコラムに掲載されたものだが、——曰く、「飴屋<sup>28</sup>」は、<sup>painting</sup> 絵画きと<sup>modelling</sup> 造形を結び合わせる。彼はスタジオと道具を身に着けて動き廻り、どんなご下命にも——たとえいかに困難でも——対応する準備をしている。粘着性の大麦澱粉を竹節に付け、プフーフーフーとやると白く輝く風船だ。それを真ん中で摘まみ、口を作り出し、ちょっと糸を付けるよう引っ張り出し、2回巻き付け、また逆回しにして、<sup>bow knot</sup> 蝶結びにし、自然が数か月も掛ける瓢箪を数瞬間で巧く手に入れる。「ねえおじさん、<sup>おい</sup>俺らは、大麦袋齧る番の鼠が欲しいんだ。」あゝ、ぼっちゃりした私の御主人よ、それは彼を困らせるに違いないと思召すか。とんでもはっぶん。彼は考える暇すらとらずにやり始め、瞬きする間に、引き出し No.2 から可塑性材料のまさに適量の一塊を取り出す。これを捏ね、またまるめ上げ、正しく一貫した時に米粉<sup>まぶ</sup>を塗して指に引っ付くのを止め、次いでピラミッド状の形にして、頂点の両側をちょっと引っ張り出し、<sup>はさみ</sup> 鋏で一对の耳を切り出し、鼻面を引き伸ばし出し、一個毎に尻尾を引き出し、円錐型を真ん中で袋状にして、一对の点々を鼠の眼にし、赤い塗料をその下に引き、青い棒をさらに下にし、金粉を一吹き、そして——「さあ、坊や、御足はどこだい。鼠は出来たよ」

「老芸術家を困惑させようと、難しい下命の実行を案出することは、子供

---

これ [“OUR NEIGHBORHOOD” OR SKETCHES IN THE SUBURBS OF YEDO, 1874, Yokohama] は日本で発刊され、東京（江戸）在住の西洋人の視点から文化と諸慣習を記述した初期の説明の1つだ。話題には、酒屋、床屋、雀捕り、医者、墓地が入っている。大半の話題は代表的な図版で例解してある。

[[http://www.baxleystamps.com/litho/purcell\\_1874.shtml](http://www.baxleystamps.com/litho/purcell_1874.shtml) ; 拙訳]

28



[“OUR NEIGHBORHOOD” OR SKETCHES IN THE SUBURBS OF YEDO, 1874, Yokohama by T. A. P[urcell]. — <https://ia801406.us.archive.org/14/items/ournighbourhood00techrich/ournighbourhood00techrich.pdf>]

たちのお気に入りの遊びだ。しかしながら、自分の巧緻に対するいかなる召喚にも対処し得——それが片手で枝からぶら下がり、空いた手で子猿を抱える猿であれ、尻尾を武器に死闘を演じる一対の鼠、ないし、後脚で立ち、優雅に爪先を伸ばし、茸（傘に使う）で陽を避けているのでも。——いかなる想像の飛躍でも高すぎることは無いように思われる。ひとたび着想が生まれれば、その実行は驚嘆すべき速さだ。」

この手の芸術家たちをよく見かけたものだが、上記の記述はまさにその通りなのだ。時には飴屋は宣伝のためにもっと高い飛躍<sup>ふけ</sup>に耽り、或る時、見たのは、明るい彩の花々と黄金色の穀物の花束で、彼の運搬道具が課する狭い諸制限から離れた芸術的価値をもって、彼の技能に素早い様式で委ねられるところだった。

上記の記述はまさにその通りなのだ。時には飴屋は宣伝のためにもっと高い飛躍<sup>ふけ</sup>に耽り、或る時、彼の運搬道具が彼の技術に課する幅の狭さからは想像もできない芸術的価値の、鮮やかな色の花々と黄金色の穀物の花束細工を作り上げるのを目にした。

また別の大変控えめな芸術家たちが街路の縁石に腰を下ろして、立派なセピア [イカの墨から作られた暗褐色の絵の具]、墨、水彩の絵をさっと描いているのが見られる——しばしば大変な雅量と素早さをもって、紙代よりちょっと多いだけの価格で。他方、第三のグループは柘植<sup>つげ</sup>の木から古代の漢字<sup>てん</sup> [篆書<sup>せう</sup>等] で個人の印判<sup>seal</sup>を彫りだしている——我々の組み合わせ文字<sup>モノグラム</sup><sup>29</sup>と同じだ。大なる古代的な関心がそれら謙遜な彫り師たちに付随する——というのは、





見られるように、そこには繰り返し中国人が辿った尊重すべき最初の歩みが見られるからだ——それも、我々西側世界が、印刷の技法においてまだ目覚める遙か以前のことなのだ。文字が彫られたのは、最初は単独で彫られ、使用したインクはその往古では単に粉末煉瓦に水——恐らく米澱粉汁——を加えたものだった。このことは、さらに古い、彫刻された煉瓦の平板に引き戻しはしないだろうか。思うに、恐らく、そうした平板の1つが、偶然に圧搾されたとき赤い煉瓦状ダストの印字を残したという発見が、活字の嚆矢であったかもしれないのだ。

床屋は大きな町には沢山ある。包み隠しのない町民は綺麗に剃ってもらうこと、そして最新の噂話が好きだ——ただし、理髪師は最近、嚴重なお上の通達を受けて、変わった性質のことを耳にしたらお上に届け出ることになっている——この措置は、政府の権能についての想像に強力な刺激を与えるものだ。綺麗に剃刀を当てるというのは日本ではちょっと拡張された操作なのだ。そこに含まれるのは、頭蓋骨の広い範囲に亘って、硬い整髪料で固めた髪の毛が整え結ばれる——まるで小さなドアノブのようだ。その全体の配置が私に常に思い出させたのは、スコットランド発祥のスポーツ、カーリングの石であった。耳と鼻孔は内外とも剃刀で注意深く削られる。子供たちの場合は、大いに注意を要することは前述の通りで、たいていは整髪スタイルの変形の問題だ。多くの者は今や、断髪については我が西方の観念を採用し、私はある高官から一對の「ダンドリアリー卿風の」髭<sup>30</sup>を蓄えるにはどうす

<sup>30</sup> ダンドリアリー卿は1858年の英国の演劇——トム・テイラー「我がアメリカの従弟」(Tom Taylor, Our American Cousin)——の登場人物で、本性良き、能無し<sup>オチビ</sup>の貴族の人格化である。この役柄はエドワード・ソザン(Edward Askew Sothorn)が舞台上で演じた。最も有名な場面は、ダンドリアリーが、更に愚かな兄弟からの手紙を読むところで、ソザンはこの場面を大いに拡張して演じた。幾つかの派生的な作品も作られ、その兄弟についての演劇もある。彼の名は2つの名祖となった(今日、あまり聞かれることは稀だが)——ダンドリアリーズ(Dundrearies)は鬚髭の特定のスタイルで、誇張されたもじゃもじゃのもみあげを形作り、ダンドリアリー髭(dundreary whiskers)とも呼ばれる。これらは1840~1870年に人気で、英国ではダビカディリー鬚髭と呼ばれた。

るか訊かれたものだ。芸術を外科医療の一分枝の威厳にまで高める象徴〔赤・青・白模様の〕の主要な意義づけについては無視され、看板の棒<sup>31</sup>は単に、ペンキ（油性塗料）の合わさったゴージャスな表示の媒体と看做されてきた。昔の外科が用いたテープのバンド——適切なオンス量の血液が患者の病的とされる静脈から抜き去られた〔瀉血<sup>32</sup>〕後で止血するための——の代わりに、我々は輪などの装飾的色彩表示をしてきたのであり、他方、天辺の平らで丸い握りは——これは犠牲者が握らなければならないのだが——、日本では尖頭、ないし星にすらなっていることがある。



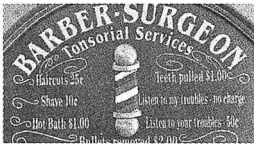
[Edward Sothorn as Lord Dundreary, sporting "Dundrearies" — [https://en.wikipedia.org/wiki/Lord\\_Dundreary](https://en.wikipedia.org/wiki/Lord_Dundreary); 拙訳]

31



[客の中には丁髷もあり、障子の影に見えるサインポールは、上部の飾りは無く、色も紅白の〈だんだら〉だ —— [https://www.google.co.jp/search?q=%E5%8A%A8%E5%B1%8B%E7%9C%8B%E6%9D%BF&tbo=u&source=univ&sa=X&sqi=2&ved=0ahUKEwjyhYOOs\\_jTAhUGObwKHRXvAQAQIQAA&biw=926&bih=598#tbn=isch&q=%E5%8A%A8%E5%B1%8B%E7%9C%8B%E6%9D%BF%E3%80%80%E6%98%8E%E6%B2%BB%E6%99%82%E4%BB%A3&imgdii=FcRAltbt41vh1M:&imgre=UWXkGFfGYcuCcM:&spf=1495074679684](https://www.google.co.jp/search?q=%E5%8A%A8%E5%B1%8B%E7%9C%8B%E6%9D%BF&tbo=u&source=univ&sa=X&sqi=2&ved=0ahUKEwjyhYOOs_jTAhUGObwKHRXvAQAQIQAA&biw=926&bih=598#tbn=isch&q=%E5%8A%A8%E5%B1%8B%E7%9C%8B%E6%9D%BF%E3%80%80%E6%98%8E%E6%B2%BB%E6%99%82%E4%BB%A3&imgdii=FcRAltbt41vh1M:&imgre=UWXkGFfGYcuCcM:&spf=1495074679684)]

[参考] 握りについては、別の説もある：床屋のサインポール——…その端末にある金メッキした瘤状のものは真鍮のタライを現し、それは時には実際にポールにぶら下げられていたのだ。[拙訳 —— *Wordsworth Dictionary of Phrase and Fable* —— [https://books.google.co.jp/books?id=IqjAJazrBwWC&pg=PA94&lpq=PA94&dq=barber+sign+pole+knob&source=bl&ots=brhd47VhSF&sig=6zHtD6T1zl8VAmrKpILcZHPElyU&hl=ja&sa=X&ved=0ahUKEwj1-afYpPjTAhXlbrwKHYjgB\\_44FBDoAQg\\_MAU#v=onepage&q=barber%20sign%20pole%20knob&f=false](https://books.google.co.jp/books?id=IqjAJazrBwWC&pg=PA94&lpq=PA94&dq=barber+sign+pole+knob&source=bl&ots=brhd47VhSF&sig=6zHtD6T1zl8VAmrKpILcZHPElyU&hl=ja&sa=X&ved=0ahUKEwj1-afYpPjTAhXlbrwKHYjgB_44FBDoAQg_MAU#v=onepage&q=barber%20sign%20pole%20knob&f=false)]



[床屋・外科の看板：理髪諸サービス —— 散髪（25φ）・髭剃り（10φ）・風呂（\$1.00）・抜歯（\$1.00）・私の悩み相談 [無料]・貴方の悩み相談（50φ）・銃弾除去（\$2.00） —— <https://search.yahoo.co.jp/image/search?rf=2&ei=UTF-8&gdr=1&p=surgery+room+barber+sign#mde%3Ddetail%26index%3D188%26st%3D6940>]

32

瀉血と床屋・外科医の関係，ポールの歴史，瀉血の際の腕の固定の記述がある ——

そうした事実は書くに値しない些事に思われようが、考古学者にとっては、象徴体系の発達に見られる人間の心の働きに光を投ずるものに、ありふれたものは何も無いのだ。

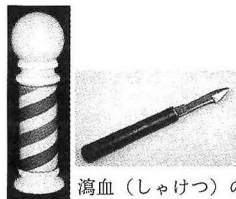
床屋からビール売りまでは<sup>たやす</sup>容易い一歩だ。日本の国民的な飲み物は発酵した米の浸出液で酒と呼ばれ、僅かにアルコール飲料の特性はあるが、あまり良い香りのものでない。ワインは白も赤も葡萄の搾り汁から作られており、英国とドイツのビールは、固有のレッテルの名前がなくてもかまわなければ日本で作られている。以前でも、ブランディその他の強い外来の飲み物が国

### ■サインポール（正式名称は、バーバーポール）



[左の3本は紅白の、右端は紅・青・白のだんだら。]

近代以前の西洋では、理髪師が外科医も兼ねていて、理髪外科医と呼ばれていました。彼らは傷を治療したり、歯を抜いたり、そして血を抜く瀉血（しゃけつ）も行っていました。これは病気は悪い体液によって起こるとされていたからで、患者は棒を杖のように持ち、腕を固定し、理髪外科医は上腕の血管を切り、血を抜きました。 /この棒が赤く塗られていて、それに洗った包帯をぶら下げて乾かしました。風で包帯が棒に巻きつき、それがトレードマークになったと言われています。/また、血管を浮き出させるために巻いた包帯（白）と止血に巻いた包帯（赤）を交互に巻いた、という説もあります。/青が加わったのは1745年、イギリスで理髪師と外科医が別々のギルドになるとき目印のため加えられた、という説と、アメリカ建国100年の1875年頃、星条旗の色から加えられたという説があり、後者の星条旗説が有力です。/また、蛭（ひる）による瀉血も行われ、上部の丸い球は、蛭を入れた容器を表しているのでは、という研究者もいます。



瀉血（しゃけつ）のとき血管を切るランセット（19世紀イギリス）



瀉血の様子（館主・梶川満氏描く）

産化される前でさえ、どちらかと言うと強い酒<sup>スピリット</sup>「焼酎」が米から蒸留されていた。製品<sup>wares</sup>は明るく澄んだ入れ物に、以下のような銘柄を添付したものに入れられていた——曰く、「盛りの花」,「大なる金魚」に相応しいトレードマーク,「良き幸運の芍薬」,ないし「三徳のワイン」等々が皮膚を温め、腹を満たし、眠りへと誘う。奇妙至極なのだが、一般に造酒屋は藪玉<sup>bush</sup>(スギ——ヒマラヤスギ——の一種の)[杉玉]を標識として使うが、これは我々の古い俚諺を思い起こさせる——曰く、「良酒に看板<sup>b</sup>[葡萄<sup>u</sup>・蕪<sup>s</sup>の蔓<sup>h</sup>の表示]を要しない」と。この習慣が、床屋の看板のように西洋から伝来したのかどうかは、いまのところ誰にも言えない<sup>33</sup>。

33 一休和尚酔臥図



英一蝶「一休和尚酔臥図」：大徳寺の一休和尚が酒ばやし（杉の葉を束ねて作り、酒のできたことを知らせる印）を掲げた酒店の店先で酔い臥しています。  
<http://www.itabashiartmuseum.jp/art-2013/collection/ntb015.html>

この絵の元と思われる歌として伝わる一休宗純<sup>いっきゅうそうじゅん</sup>禪師の「極楽をいつくのほどと思ひしに杉葉立てたる又六が門」（極楽をどこらあたりだろうかと思っていたが、杉の葉をしるしに立てた、酒屋の又六の門であった。）（『百物語』[上] 万治二[1659]年）で「又六は大徳寺門前酒屋」,これを大神神社<sup>おおかみわじんじや</sup>〔奈良県桜井市三輪〕が紹介しているのは、同神社の<sup>おおもものぬしのおおかみ</sup>大物主大神が酒造りの神で、大神神社の神木である杉霊威が宿ると信じられたため、現在も多くの酒造業者に大神神社から「しるしの杉玉」が授与されている。  
<http://oomiwa.or.jp/jinja/kamigatari/>

また杉玉は、喜田川守貞『類聚 近世風俗志\*』,『山家鳥虫歌 近世諸国民謡集\*\*』等にも紹介されている。江戸時代から、新酒が出来搾りを始めた印として吊るされた。西洋からの伝来ではない。

\*「酒 古より清濁あり。清酒をもちろはくと云。諸白也。濁酒を片白と云也。今江戸の俗の中汲と云うも濁酒の一種也。又異名種々ある中に竹葉と云名あり。因<sub>レ</sub>之て女詞に「さゝ」と云。笹なり。又崇神紀に宇麻佐開瀾和云々\*\*\*。三輪山には杉を神木とす。此故に酒店の招牌に杉葉を用ひさかばやしと号け、酒旛に代る。／杉葉を以て製<sub>レ</sub>之。大小不同あり。大略尺余。或二尺許。酒店の軒に釣る。昔は三都諸国とも専<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>之也。京坂、今も往々、用<sub>レ</sub>之たる店あり。江戸には深川△町\*\*\*\*に一戸用<sub>レ</sub>之店を見るのみ。田舎には今も専<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>之。」[魚住書店, 1964, 下巻, p. 419; 原文旧字体, 句読点追加引用者]

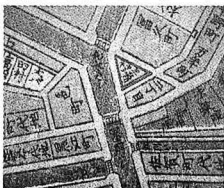
ここに、市中の掲示板の、文字通り正確な複写がある——これで、文明の急速な進歩を示す一助となる——



\*\* 「池田・伊丹の上諸白も 麴がなければ見て通る／「池田」は今の大阪府北西部、「伊丹」は兵庫県南東端の地名で、いずれも古来有名な清酒の産地。特に伊丹酒はすでに慶長年間（一五九六—一六一五）に江戸に積み出された。「上諸白」は、麴も米も共に特別に精白してつくった上等の酒。「諸白」は白米と黒麴で醸した「片白」の対。『延享五』に上句「池田伊丹の新諸白も」。類歌として『賤が歌袋』初編「酒は呑みたし酒代はもたず、酒屋ばやしを見て通る」（『樵蘇風俗歌』中にも出。『佐渡の民謡』盆柄唄に下句「酒屋看板見てもどる」。「酒屋ばやし」は、酒林で、昔、杉の葉を丸くたばねて軒先にかけた酒屋の看板。】『山家鳥虫歌——近世諸国民謡集——』浅野健二校注、岩波文庫、巻之下、山陽道八国、播磨、p. 182. 下線引用者。]

\*\*\* 味酒は三輪の枕詞なり。崇神紀に宇麻佐開瀨和能等能能《ウマサケミワノトノノ》。また此集卷四「味酒呼三輪《ウマサケヲミワ》のはふりが」などあり。味《ウマ》は甘美《ウマ》しと贊《ホム》る辭なり。酒とはサカエの切《ツツマ》れるにて是を飲めば心も面も榮ゆるよしなり。三輪とつづくる意は神に供ふる酒を美和《ミワ》といふより美酒之神酒《ウマサケノミワ》てふ意にかくはつづけたり。神酒を美和といへるは崇神紀、舒明紀に神酒《ミワ》。和名抄に日本紀私記云。神酒、和語云美和。此集卷二に哭澤之神社爾三輪須惠雖禱祈所《ナキサハノモリニミワスエノマメドモ》。卷十三に五十串立神酒座奉神主部之《イクシタテミワスエマツルカムヌシノ》などあり。三輪乃山の下にヲの言を添て見るべしと略解にいへり。〔近藤芳樹、萬葉集註疏——<http://www.geocities.jp/huzisan/kondou.htm>〕

\*\*\*\* 「東海道四谷怪談」に出てくる「三角屋敷」という場のことか。深川の八幡宮の裏手あたり 今の「深川一丁目」内にあった。〔<http://tukitodora.exblog.jp/8735040/>〕



〔<http://tiiibikuro.jugem.jp/?eid=1079>〕

<sup>nindoshu</sup>  
「忍冬酒<sup>34</sup>」の梗概

これは度の強い蒸留酒で、アルコールに他の諸物質を混じ、<sup>スイカズラ</sup>匂い忍冬の花で香りを付ける。非常に甘味があり、幾分強く、ウィスキーに似て誰にも好かれ——心を興奮させ、衰えた方々の滋養強壯の効果がある。1878年にパリ万博で高い評価を勝ち得た。「淑女紳士諸賢よ、一杯の<sup>たかつき</sup>高杯にてこれを味わい、如上の事々の重々真なることを体得され給わんことを望むものなり。」

今のところ「衰えた方々」の隊列に参加する気にならないので、これをやり過ぎして何か別の面白いものへ行こう。この大都市の裏通りの多くには、家禽が息づいている。大半が小さく、どちらかと言うと瀟洒な種類である雄鶏たちは壮大な尾羽を持ち、それが優雅に曲がっている。最善のものは今や欧州、アメリカで愛好者にいい値で売れている。

しかしオコジョが夜に侵入する——もっとも実際のところ、日中でさえ、これらの動物に裏通りで出会うのも珍しいことではない。狐もまた、御狐様

<sup>34</sup> 忍冬酒の忍冬は「スイカズラ」のことです。この花弁や茎、葉から造る酒は体を暖め滋養強壯に効果があると言われております。家康は数々の戦を戦い当地三方原の戦いではピンチピンチの連続であったと言われております。そんな中で忍冬酒を口にして家康が「ファイト一発」ピンチを脱出したことは史実が物語っております。まさに戦国の〇〇ビタンDと言ったところでしょう。／また、5月から6月に花を付けるスイカズラ自体、漢方薬で関節の痛みに効くといわれております。この事から言っても飲んで見る価値がありそうです。／浜松で忍冬酒が製造されたのは戦国時代の永禄元年からとされています。家康が三河から浜松に本拠地を移した頃、浜松で薬草の研究をし、忍冬酒を造っていた神谷権兵衛が家康の命を承けて本格的に製造を始めたと言うことです。家康はこの酒がことの他気に入り、その後家康が神谷家を優遇し、太刀や家屋敷を与え保護しました。家康愛用の薬酒との評判をとった忍冬酒は浜松の名物の一つになりました。／徳川家康の覇権が確立されて各藩から進物用などに使われ注文が殺到し神谷家は地元の童歌にも歌われるほど繁盛しました。明治以降も製造されましたが、第二次世界大戦の戦乱の中、昭和18年製造中止となってしまいました。[<http://nindousyu.jimdo.com/>忍冬酒のうんちく/]

の効験<sup>claims</sup>の灼<sup>あ</sup>かさの理由から、市中を走らせておくと、外国では目にすることはずっと少ない。

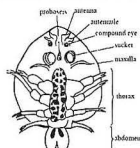
あちこちに金魚屋を見かけるが、これは比較的に弱って死にやすい仕入れ——生きたままの金銀の鯉——の販売が増加しているのだ。これらは仕切られた水槽に、価格別、その他で——成長、発達のあらゆる段階に仕分け——区別されているのが見られる。聞いて驚く人がいるかもしれないが、金魚の稚魚はほとんどがどれも全く黒い。多くの変種が養殖家のたちによって有望なタイプを選別して育てられ、それら変種の或るものは法外な金額を稼ぎ取るのだ——単に十分醜いというだけにしても！

私は或る病気について相談を受けた——これは大規模な鯉の業者の水槽に生じたものだ。その原因は微小な寄生虫ウオジラミ<sup>Argulus foliaceus</sup><sup>35</sup>の暴食によるもので、これは普通の寄生の現象とほとんど正反対に、高度に美しく特殊化した構造を持ち水晶のように透明だ。これは私が顕微鏡で見た事例の1つで、観察下に長時間留めおけるものだ。2つの強力な吸盤を持ち、それで餌食に密着し、それから長い空洞の極度に鋭い両刃<sup>r a p i e r</sup>の刀状の触角<sup>probe</sup><sup>36</sup>の鞘を払い、不幸な金魚に差し込み、その際、結構な量を吸い取る。それはまた一連の鋭い鉤で武装しており、その平らで、房の有る、オール状の諸脚で自由に、餌場から餌場へと、自力で進む。

<sup>35</sup> ウオジラミ *Argulus foliaceus*



<sup>36</sup> 両刃の刀状の触角。正確には proboscis。



[[https://search.yahoo.co.jp/image/search;\\_ylt=A2RCAw3J6QtaD0gAnUSU3uV7?p=argulus+foliaceus+proboscis&aq=-1&eq=&ei=UTF-8#mode%3Ddetail%26index%3D0%26st%3D0](https://search.yahoo.co.jp/image/search;_ylt=A2RCAw3J6QtaD0gAnUSU3uV7?p=argulus+foliaceus+proboscis&aq=-1&eq=&ei=UTF-8#mode%3Ddetail%26index%3D0%26st%3D0)]

街路の清掃は、幾群もの大型でオオガラスの嘴を持ったカラス (*Corvus japonensis*, Bp.) と、ちょっと堂々とした黒耳のトビ (*Milvus melanotis*, F. & S.) で、これは夥しい数で晴れた日に都市の遙か上空を回って飛んでいる。鳴き声は奇妙な喉音のトレモロ調で、カルカッタ [現コルカタ] 辺りのトビに似て、その習慣が非常に近似する。我々の近所の肉屋はトビに餌を投げ与えて遊んでいたが、トビは狂いない正確さでそれをキャッチした——もともと、その動きはしばしば騒々しくきこちないものではあったが。時には彼らは、投げ縄状のループの真ん中に置いた肉片で捕らえられた——鳥が飛び立とうとするときつく締まるのだ。私はその一匹がそのようにして少年に捕捉されるのを見た。飛び立ってロープいっばいに伸びたとき、突然、石のように地面に落ちたが、翼はずっと完全に開いたままで、尾は開いていた。同じ位置にずっと居て、取り囲み、自分を見つめる群を臆面も無い威厳をもって眺めていた——落ちたれど、<sup>ルンフェル</sup> 墮天使のごとく誇り高く。

#### ヘンリー・フォールズ (4)

この章ではフォールズは、築地鉄砲洲の居留地近辺を散策して目にした情景を描いている。入船町は1869(明治元)年1月1日をもって東京が開市場となり外国人居留地が開設されるのに先立って1868年に武家屋敷を取り壊した後を町地として成立した町名である。この時1~5丁目(当初はこの地域が1丁目から9丁目までに分割、現入船1~3)ができ、1871~73年にかけて6丁目から8丁目が成立した。槍屋町(銀座3, 4)・弓町(銀座2, 西銀座2)は江戸時代からの町名である。この章で広告の中に出てくる伊勢勝(西村勝三)・造靴場は入船町5丁目1番地にあった。また旧京橋区槍屋町11番(現在の中央区銀座4丁目4-1)には明治14年成医会講習所(現 慈恵医大の草創期)が出来、フォールズの歩いているこの地域は明治の先端を行っていた。

築地居留地の存在は1869年から1899年に不平等条約が改正されるまでの30年間である。居留地は外国人が競貸——外国人は日本の土地を所有できず、競売により恒久的に借受けそこに建築、既存の建物の購入・賃借は外国人間で自由ができる——によって手に入れた土地で、外国人のみが居住できる官有だった。これはほぼ現在の中央区明石町(明石町, 新湊町6-7, 新栄町6, 入船町7丁目<sup>37</sup>)に当たる。居留地の第一回競売は1870年6月2日に行われたが、それまで外国

<sup>37</sup> 「東京府志料」1959年による町名で、川崎晴朗(2001『史苑』pp.100-114, 立教大学)によると1880年の地図と重ね合わせ、新栄町は6~7丁目、入船町8丁目が含まれるとしている。



人は「相対借り地域」に家を借りていた。この地域は日本人所有地にある家屋を個別交渉により賃貸借し、日本と外国人が共に暮らす「雑居地域」である。この地域は当初の計画の変更により、居留地を挟んでほぼ南北に分断され、南は、南小田原町 1-4、南本郷町、上柳原町、南飯田町で現築地 6 丁目から 7 丁目の一部、北は南八丁堀（新富町 1 丁目）、新湊町、新栄町、入船町（現入船）で、ここからは新富町、木挽町（現銀座の一部）、銀座へと繋がる。南は築地を過ぎると浜離宮庭園、近くには新橋停車場となるが、相対借り地域を含めた外国人居留地とその近辺が東京におけるフォールズの活動の場となる。



[外務省記録局『締盟各国条約彙纂』pp.1042-3の間頁, 明治17]

1870年図、B、Cの部分は外国人居留地、黒部分；相対借地域、A部分も1872年の図では相対借地に、左側「外国人旅館」の後ろの黒部分は旅館部分と共に1872年の図（前掲書 p.1048の次頁）では海軍用地になっている。左側、相対借地域の運河の向こうは南小田原町橋を渡って西本願寺。

(ながお・しろう 名誉教授)

(たかはた・みよこ 英学史研究家)